

林木育種協議会便り

遠藤 昭太

本年度の東北基本区林木育種協議会は去る7月23日～25日、林野庁、営林局、林業試験場、県、民間林業団体、東北林木育種場などの関係者約50名が参加して開催されました。

会議は山形県上市市で、現地討議は山形県長井市浅立のシラハタマツ特別母樹林および福島県耶麻郡吾妻天然スギ林で行われました。

会議においては、次代検定林設定上の問題点、林木育種事業の今後の進め方、抵抗性育種事業の進め方、採種圃の雪害対策、スギ採種圃の体質改善、スギ球果の採取方法、スギさし木苗の養成方法、部会の設置などについて討議された。また各県から林野庁に対し、採種圃の造成・管理費、次代検定林の管理費、さし木苗養成施設費などの助成について要望がありました。

以上のうち主な事項について述べます。

1. 次代検定林設定上の問題点

次代検定林の設定現況、検定用苗木の育苗、共通系統、次代検定林調査要領、報告などについて東北林木育種場から説明があった。このうち、検定用苗木の育苗と共通系統について述べると、

(1) 検定用苗木の育苗について

次代検定は遺伝変異を見てゆくのであるから遺伝変異が大きいほど育種の効果が期待される訳である。従って検定用苗木の育苗にあたって、人為的な操作によって遺伝変異に変動を起させることのないようにする。

苗木の生産過程の中で特に問題となるのは間引の操作であり、これが遺伝力(率)に影響を与え

るので検定用苗木は間引しないで生産する。

(2) 共通系統について

さし木苗によるスギの次代検定林には、東部育種区、西部育種区別々にではあるが、共通クロンが定められ、それぞれの検定林に植栽されている。

これは東北育種基本区における次代検定林は、各機関が保有する精英樹を対象にして、各機関ごとに検定を行っているので、それぞれの検定結果を総合判定する場合に使われる訳であるが、こうした目的のほかに、地域差(同じ環境の所)を見いだすためにも使用することになっている。

このような目的のための材料は、実生苗による次代検定林についても当然必要で、できるだけ早く共通系統を定めるようにしたい。

2. 抵抗性育種事業の進め方

抵抗性育種事業は、昭和45年度から始められ、耐雪・耐寒性個体も計画本数1,297本に対し863本がすでに選抜されている。

これら抵抗性個体の早期検定が望まれているが現在のところ決定的な方法はまだ確立されていない。一番確実な方法は、被害の発生する場所数か所に分散し試植してみることである。この場合、場所の選定が大変重要なので十分検討の上実施する必要がある。

耐寒性の場合、風洞実験による検定も精度が高いので篩分けに使えるだろう。

3. スギ採種圃の体質改善

スギ採種園の体質改善は、低発根率クローンの除去で一応解決されるが、スギ採種園の体質改善で考えられることは、着花・結実不良クローンの除去であろう。しかし着花・結実までには一定の時期があるので、その判定は現在では困難である。またGB処理をしても効果のないクローンもあるが、このようなクローンは概して成長その他形質の良いものが多いので、ただ除去しないで育種母材として利用することを考えてはどうか。

4. スギ球果の採取方法

スギ球果の採取には多くの労力を要する。その省力の方法として着果枝を切りとって乾燥させ自然に種子を落下させる方法もあるが、これは自然脱粒性のよいクローンに利用するとよいだろう。

脱粒性の悪いクローンは、枝つきのまま乾燥させても自然に種子が落下しないので無理をして脱粒させることになり、そのため夾雑物が混入し種子精選に手を要することになる。

5. スギさし木苗の養成方法

採種園からの穂木生産も年々増大し、今後民間養成者によるさし木苗養成を拡大するにあたり、穂木の発根率とともに生産苗木の形態及び特性等において、一般実生苗と比較して見劣りのしない養成技術が望まれるとの意見が出された。

さし木苗と実生苗をくらべて形質的に異なる点は、さし木苗のほうが、①下枝の発達が良くない。

②柔軟性が小さい。③初期成長が良くない。などで①②が雪害にかかり易い一因といわれており、③がさし木苗普及をはばんでいる一因である。

さし木苗と実生苗の形質的相違は、さし木、実生という養苗方法の相違からくるもので、これを同じようにすることはむずかしいが、これを近づける努力は必要だろう。

①については、さし穂を短くすると下枝の発達した苗木ができるといわれている。②③については生理的な要素もあり、施肥技術である程度改善できると考えられる。

今までは、発根を主とした試験・研究が主だったが、今後は形質を加えた試験・研究が必要である。

6. 部会の設置について

当協会の下部組織として専門的な事項を協議するための部会を設けることになり、その運営のための規約は東北林木育種場で案を作り関係機関と協議することになった。

以上協会の概要を述べたが、最後にこの会議を開催するにあたり、会場、宿泊、その他全般にわたりお世話いただきました山形県庁、山形県林木育種場の関係者に対し、また現地視察の際に御配慮いただきました福島県庁の関係者に対し厚く御礼申し上げます。

〈東北林木育種場経営課長〉

奥羽支場の雑草について

押 切 英 雄

灯台元暗しというように身近にあることがらについて見過し勝ちになるのが普通でないかと思われる。

仕事から林木については常に関心をもって接しているが、草本類については見落していることが多い。

そこで、奥羽支場で48年秋から構内の草本類について調査を進めているが、その一部について紹介してみたい。

構内には約200種類ほどの草本類が生育してい

ると思われるが、現在約その3分の1ほどを採集し整理中である。

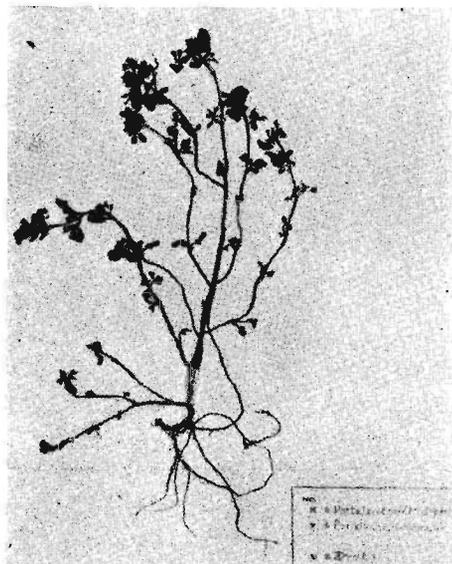
雑草の生えている主な場所と種類について

生育している場所は、苗畑、荒地、通路、やせ地、肥よく地、等によりその種類の異なるのは当然であるが、その主なものは次のとおりである。

苗畑に繁茂するものとしては、スズメノカタビラ、コニシキソウ、タネツケバナ、ヒメスイバ、カタバミ、コウボウ、ザクロソウ、マメグンバイナズナ、スベリヒユ、ナズナ、イヌビユ等がある。

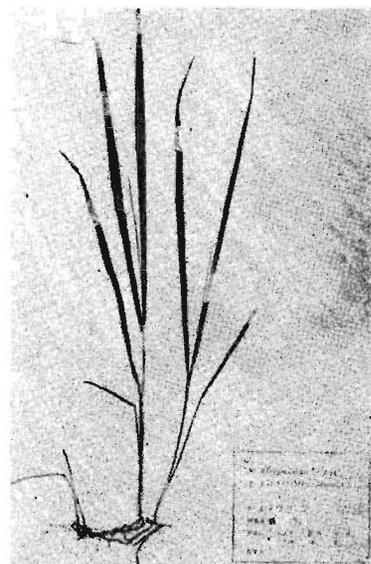
中でも、スベリヒユ、コウボウは、除草するのに大変労力を必要とするもので、スベリヒユの場合は、非常に水分の多い植物であり、摂氏30度程度の温室で乾燥させても枯死するまでは、2週間程度かかるようであり、少しの水分がのこっても再生する雑草とみられた。スベリヒユの除去としては、除草剤（ニップ）が最も有効であると思われる。

スベリヒユ



また、コウボウは、地下茎によって繁殖する雑草で「根」まで除去しなければ、その根絶は不可能であり、取りのぞくのに、乾燥期に耕耘し、土

コウボウ

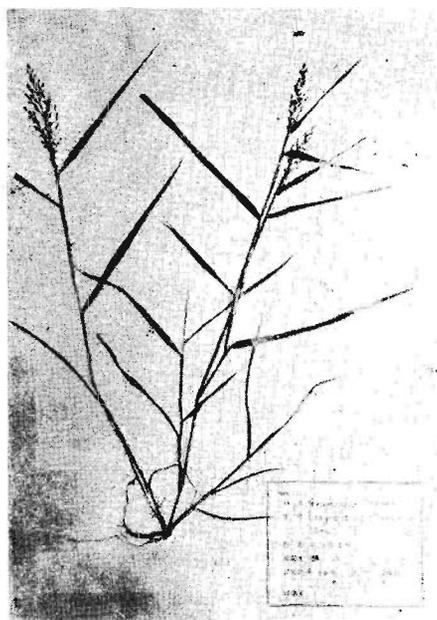


壤とともに乾燥させ枯死させるのが良い方法である。

当場で多い雑草は、イネ科、キク科、あぶらな科等であり、この種の草本の特性である繁殖力の旺盛さ、痩悪地に対する生育力は他の箇所と変わらない。

通路には、ニワホコリ、オオニワホコリ、オオバコ、タンポポ等がある。

ニワホコリ



カラケツメイは群生して生えており、9月頃黄色い花を咲かせ、きれいな草である。

荒地には、オトギリ草も生えているが、薬草としても利用されるものである。

主な雑草

- | | |
|-------|---|
| あぶらな科 | ナズナ、マメダンバイナズナ、タネツケバナ |
| いね科 | オオニワホコリ、カモジグサ、チガヤ、コウボウ、ニワホコリ、アキメヒシバ、スズメノヒエ、オヒシバ、スズメノカタビラ、 |
| うらぼし科 | リュウメンシダ |
| うり科 | ゴキズル |
| おおばこ科 | ヘラオオバコ、オオバコ |
| かたばみ科 | カタバミ |
| きく科 | オオアレチノギク、ヒメジヨウ |
| さといも科 | ヒメムカシヨモギ、タンポポ
カラスビシャク |

ざくろそう科	ザクロソウ	とくさ科	スギナ
すべりひゆ科	スベリヒユ	ひゆ科	イヌビユ
たで科	ヒメスイバ、マダイオウ	まめ科	カワラケツメイ
つゆくさ科	ツユクサ		
とらだいぐさ科	コニシキソウ		

〈奥羽支場経営課種苗係〉

当育種場内の植物の紹介 (2)

佐々木 文 夫

ムラサキ——むらさき科

いちじるしく斜上粗毛をつける多年草で、根は太く、紫色。茎は少数で直立し、高さ40~70cm、多数の葉がある。葉は無柄で長さ3~7cm、幅7~20mm、粗毛があり支脈は少数でやや並行する。花は6~7月頃開く。分果は灰白色で平滑、光沢があり長さ約3mmとなる。

一般にムラサキという名から花の色が紫であると想像されるが、実際に花は白色で根が紫色である。根を掘り起してさわると手が濃紫色になるほどである。昔、県内では南部紫根染めと称して根が染めものの原料として用いられた。

分布：日本全土、やや乾燥した草原に生えている。県内各地に分布するが、最近そう多くは見られなくなった。

当場内では、最も希少価値の高い、保存しなければならない植物であるし、職員が保存に努めている状態である。

天皇・皇后両陛下が、当場を御視察の際に樹木園において鉢植に移植し展示したところ大変関心を示めされた。その際、報道機関にも大々的に取り上げられ、当場のムラサキも一躍有名になった。

また、移植が難しいと言われているが、展示した場所に御視察記念として、鉢から取り出し植えたところ順調に生育し、秋には実をつけたほどなので、来年も出てくるものと思われる。

そのほか場内には、同じムラサキ科の花が紫色に咲くホタルカズラがいたる所に生育している。

ゼンテイカ(ニッコウキスゲ)——ユリ科

山地の草原に生える多年草。地下茎は短く、株本から多くの丈夫な根をだし、根のところどころはふくれる。葉はそう生し、2列で跨状にならび

先は垂れ、無毛、長さ60~70cm、幅16~21mm。花茎は立ち、高さ60~80cm、葉はなく、苞は花序分岐点以上につく。花序は短く、2分岐し、花を総状につける。

一般にゼンテイカと言うより、ニッコウキスゲと言う名のほうが知られている。正式には高山植物とは言いがたいが、八幡平の代表的な花で、ユリの形に似た一番多く目立つ花だと言った方が案外わかりやすいと思われる。

八幡平では自然保護が叫ばれている折、観察にはいろいろな制約を受けるが、その点場内では、じっくり観察が出来る。

分布：本州(北、中部)に分布し、県内では各地の山地草原に群生することが多く、当場内にはいたる所に見られる。

そのほか同じ仲間でも、場内には見られないけれども、県内には花色が赤橙色のノカンゾウや、花が八重咲きのヤブカンゾウが見られる。これらはいずれも若芽やつぼみ等を湯がいて食べると案外おいしいものである。

場内に多く咲いているからと言って、根こそぎ掘ったりしないよう、あたたかく見まもってやりたいものである。

引用文献

大井次三郎著・日本植物誌 顕花編 至文堂

北村四郎、他共著・原色日本植物図鑑

草本編 [1]上、保育社

岩手植物の会編集・岩手県植物誌

〈東北林木育種場原種係〉

昭和49年11月1日発行

編集 東北林木育種場

岩手県岩手郡滝沢村滝沢

TEL 019688 (滝沢駅前局) 4517

印刷所 杜 陵 印 刷